オレンジの雪

柚蛸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
オレンジの雪

【Ｎコード】
Ｎ１２２３Ｄ

【作者名】
柚蝣

【あらすじ】
普通。平凡。退屈な毎日だった．．．けど彼女がオレンジの雪を降らせてくれんだ。

オレンジ

～～♪～～～♪

チカチカと光るオレンジのランプ

あの子からのメール。

携帯に飛び付く俺。

「「今日はありがとね♪♪」」

即行返信する。

「「あ～

別に何でもねぇよ。」」

馬鹿な先輩に

絡まれてたあの子を助けたお礼のメールだった。

／／やべー／／
メールまぢ嬉しい／／

俺は、はたから見てそんな目立つような盛り上げキャラでも地味なオタク系でもないし。

いたって普通。普通が1番。

仲良い友達数人いるしもグループもある。

仲良いけど―…
なんかつまんなくて。
友達とも深く付き合えねんだよな。

変わってんのかな、俺。

今まで何かに夢中になった事なんてなかった。
恋だって友情だってどっか冷めてしまってた。

それなのに、この子と出会って世界が１８０度変わってしまった気がしだんだ。

すれ違い

「「あ♪おはよ、壱」」

「「お・・・おう!!」」

俺と千尋は徐々に仲良くなっていつしか何でも話せる仲になっていったんだ。

でも、その時そう思っていたのは俺だけだったのかも知れないな。。

「あのね、私。好きな人がいるの。」

肌寒くなってきたある日の放課後。

千尋が急にそんな事を言ったから、内心驚きながら俺は聞いた。

「え?何だよ。急にどうした?」

「へへっ♪」

「・・・・誰？」

「ん～智稀くん・・・・。」

―片平智稀―
俺の友達だった。

頭が良くて、友達思いで凄くイイ奴だ。

「・・・・・ともき。か」

「うん。」

強く見えるけど本当は弱くて、守ってやりたくなる千尋とは何だかお似合いだった。

千尋は急に顔を赤らめて俯いた。

しばらくの沈黙の後・・・・

俺は乗っていた机から飛び降りて彼女の座る机の前にしゃがみ込んだ。

「千尋、茹でダコみたい。」

泣きそうになっている俺の思いが、

バレぬよう精一杯笑って彼女を茶化した。

ちゃかし合って、いつの間にかずいぶん時間がたっていた。

「なんか青春っぽいね。」

窓の外の夕日を観ながら千尋が呟いた。

そして、俺と千尋は顔を見合わせて笑いあった。

この時間が。

この瞬間が。

ずっと続いてくれるよう願いながら。

あの放課後の告白の日から、千尋と智稀が仲良さ気に話しているのを何度か見掛けるようになっていった。

歯車は回る

学校の廊下。

教室。

放課後の道。

ふたりを見るたび胸が
ギューと握り潰されたように苦しくなった。

やっぱり俺は千尋が好きなんだ、って今頃自覚させられている。

「はあ～馬っ鹿みてぇ。」

教室の窓から見える雪景色の中を歩く千尋を見つめながら叫んだ。

「おい。なに独り言いってんだよ？」

笑いながら俺に話かけて来たのは・・・・

あの智稀だった。

「あ・・・・おう。智稀。別に、なんでもねーよ。」

俺は智稀から視線を外し下を向いた。

「なんだよ。秘密なんて淋しいじゃんか。」

「だから秘密なんかねーよ。」

「あーあ。壱ちゃん機嫌ナナメなわけ？」

あまりの俺のぶっきらぼうさに目が？マークになりながら智稀は話続けた。

「そーだ！壱に話したい事あったんだ。俺の恋愛相談のってくんねぇ？」

今度は俺の目が？マークになっていた。

「・・は？」

「・・・だからさ。
俺ね、今気になってる人いんの♪」

「おい・・・何だよ急に。」

智稀は、
何か考えた様に眉間にシワを寄せ
真面目そうに窓を見つめ話しを続けた。

「千尋ちゃんの事いいなぁ～って思ってんだ。」

・・・・・

俺は時間が止まってしまったかのように動けなかった。

「だからさ、協力してよ。壱、千尋ちゃんと仲良いじゃん♪」

「・・・壱？」

フリーズしてしまったかのように動かなくなった俺を智稀が心配したよう覗きこんでいた。

（なんだ、千尋両思いじゃん。）

「あぁ、わかった。」

とても気の入っていない返事を返したが、胸は何だかチクチクと苦しくなった。

智稀は一瞬苦い物でも食べたような切ない表情をうかべ、

「うん。ありがと。
んじゃ俺帰るわ♪」と言って教室を出て行った。

さっきの表情は、どこにいったのか智稀はいつもの笑顔で教室を出ていった。

壱は、ぼーっと智稀の背中見つめていた。

千尋の事を考えながら．．．．

この後でこれから先自分を苦しめる事に為るとも知らずに。

世界の中心

あの放課後から1ヶ月。

あの日から2人の間は、急速に縮まっていった。

「ねぇ～最近千尋と智稀くん仲よさ気ぢゃない？」

「あ～私も思ったぁ！！
やっぱ付き合ってんじゃない？」

「ショック～智稀くん狙ってたのにぃ。」

クラスの女達が騒いでいる。

両思いだし、もう流石に
“付き合ってる”よな。

俺は、なぜ千尋と智稀の仲を取り持つなんて言ってしまったのだろう。

あの時、
智稀に俺の気持ちを伝えていれば・・・・

素直に千尋に愛してると言えていれば・・・・

いまさらの後悔は無意味だというのに。

「愛してる」

小さく呟いてみる。

千尋に言えなかった想い。

「誰を？」

机に座ってぼーっと本を眺めながらブツブツ呟く俺の後ろから千尋が声をかけてきた。

「おわぁ？！
い・・・いや・・・違くて、
この本の台詞だよ！！！」

声が裏返りそうになりながらも必死でごまかした。

「ふ～ん。
なんだぁ～、壱に好きな人でも出来たかと思ったのに。」

千尋は、つまらないと言いながらいたずらっぽく小さなえくぼをつくって俺を見つめた。

「んなもん・・・・いねーよ。」

目を下に向けてそっけなく言った。

すると、急に俺の机に小さな雨が降ってきた。

俺は、ハッと顔を上げるとさっきまで微笑んでいた千尋の大きな目

からポロポロと涙が頬をつたっていたのだ。

「おい。何だよ?!
大丈夫か?」

何も言わず泣き続ける千尋。

「なんでお前が泣いてんだよ。」

そう言い終わるか終わらないかのうちに、千尋は教室から飛び出して行ってしまった。

「おい!!!!!」

俺は、無意識のうちに千尋を必死に追いかけていた。

互いの気持ち

千尋を追って教室を出た時、智稀の姿が目についた。

俺が追い掛けて千尋に何て声をかけたらいいのか。

千尋には智稀がいるのだ。

そんな事を考えて足がすくみ動けなくなってしまった。

……いつの間にか千尋の姿は見えなくなっていた。

ぼーっと中庭を歩いていていると、
冷たい北風が吹きハッと現実に引き戻された。

千尋に連絡をしようと携帯を取り出した。

すると携帯から着信音が鳴り響いた。

着信音にびっくりして携帯を掴みそこね、浅く降り積もった雪の上にオレンジの着信ランプがチカチカと光っていた。

携帯のランプは、雪を綺麗なオレンジ色に染めていた。

そのオレンジ色は今まで見た事のないくらい輝き透き通っていた。

俺は、ハッとして携帯を拾い上げ通話ボタンを押した。

「……あ、千尋……大丈夫か？」

「……」

千尋は、無言のまま鼻を啜っているだけだった。

「何で泣いてんだよ」

俺は、千尋がなぜ泣いているのか全くわからずにいた。

「ねぇ、……初めて会った時の事覚えてる？」

さっきまで鼻を啜っていた千尋が小さい声で呟くように話し始めた。

「あの時から、ずーっと壱の事好きだったんだよ？」

「…え？」

俺は千尋が何を言っているのがわからなかった。

一分、二分……静まり返った中庭は時間が止まったかのように長く感じられた。

「だって千尋は……智稀が」

、と言いかけた壱の言葉を途中で突っ切って千尋は言った。

「だから、智稀くんに協力してもらってたの」

それから千尋が説明した内容はこうだった。

鈍感な俺にヤキモチを妬かせるために好きな人がいると言った。

智稀は本当は彼女がいるけど仲を取り持つために協力してもらった。

壱が自分の事を何とも思ってないんだと思って泣いてしまった。

……

「え、えぇ～！！！嘘だろ？」

「……こんな嘘付かないよ」

「ほんと鈍感だね」

千尋が電話先で小さく笑った。

「いや、だって智稀が好きなんだと思ってたから」

「はあ～何だよ。今まで悩んでたのが無意味だったんじゃねーかよ」

俺は急に可笑しくなって笑い出してしまった。

「もー。何笑ってんの」

「ごめんごめん」

「なぁ、千尋大好きだよ」

互いの気持ち（後書き）

いままで読んで頂いてありがとうございました。初の連載に挑戦しましたのでへぼい作品になってしまいました。すいません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1223d/

オレンジの雪

2010年11月29日16時05分発行